

(様式1)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書【総括】

都道府県名 (推進地域)	新潟市	番号	55
-----------------	-----	----	----

市町村名 (推進地区名)	協力校名	児童生徒数
新潟市	東山の下小学校	887
新潟市	小須戸中学校	259

○ 実践研究の内容

1. 推進地域における取組

※ 2に同じ

2. 推進地区における取組

(1) 実践協力校への指導・支援

① 第1回学力向上推進会議(平成27年11月6日 小須戸中学校)

■推進会議①

小須戸中学校の取組説明

■授業公開(9学級)

指導案はA3見開き(左ページに構想カード, 右ページに展開)

■推進会議②

- ・グループ協議(「学習課題とまとめ」をフレームワークとした授業改革についての成果と課題を話し合う。)
- ・協議内容の発表(グループ代表から協議内容を発表)
- ・学校支援課の総括(保科総括指導主事)

■指導

- ・岩崎 保之 教授
- ・田中 博之 教授

② 第2回学力向上推進会議(平成27年12月16日 東山の下小学校)

■推進会議①

・東山の下小学校の取組説明

■授業公開① 4校時

■授業公開② 5校時

※ 授業公開①②とも、1時間の板書計画型略案による授業

※ 授業公開①②とも、A B二つのグループに分け、田中教授と岩崎教授はそれぞれのグループを参観。

■分科会

・5分科会を設定し、それぞれの分科会にコーディネーターとして指導主事が入り、一つ一つの授業について具体的に指導を行った。

■推進会議②

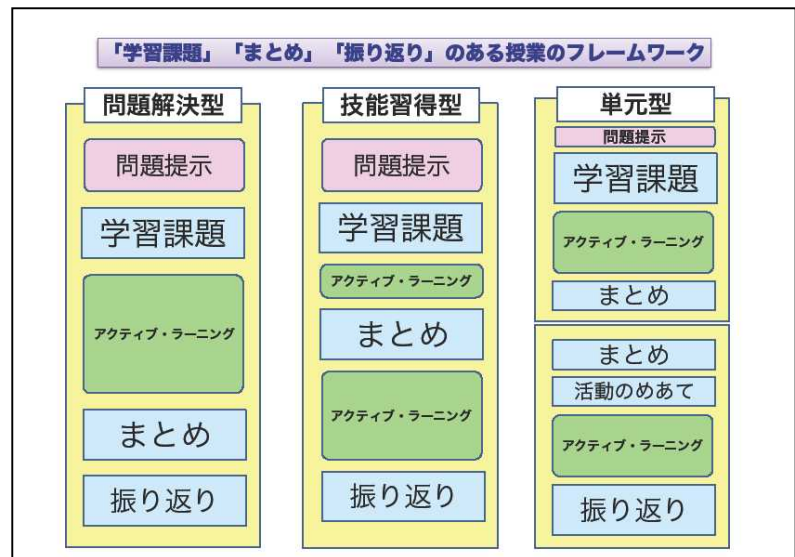
岩崎 保之 先生

田中 博之 先生

(2) 教育委員会主催の研修会開催等の取組

① 授業改善のための「授業づくりリーフレット」、「授業づくりガイドブック」等を活用した授業改善の取組

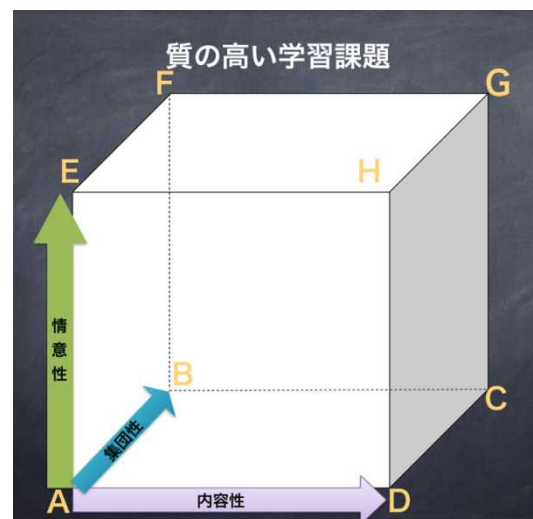
右図は「ねらいと評価の明確化」を目指した新潟市の授業づくりのフレームワークである。今年度は、右のフレームワークを活用した授業改善の中で、学習課題の質を向上させること、アクティブ・ラーニングを充実させることに焦点を当てて授業改善を推進してきた。



質の高い学習課題には、「内容性」「情意性」「集団性」の三つの要素があり、これらを高めていくことによって、質の高い学習課題の具現化と明確な目的をもったアクティブ・ラーニングの充実が図られるよう働きかけた。

② 市内各学校への計画訪問

市内168校(小111校, 中57校)のうち、今年度は87校について指導主事が計画的に訪問した。学校訪問時は、全学級に指導案作成及び授業公開を依頼し、複数の指導主事が分科会を分担しながら全ての授業について具体的な指導を行った。



また、全体指導の場を設定し、「質の高い学習課題」について、具体例を基にしながら話をしたり、アクティブ・ラーニングが具現されている授業映像等を提示したりしながら全体

指導を行った。

(3) 管理職を対象とした授業マネジメント研修会の実施

① 授業改善マネジメント校長研修（小学校：10月19日 中学校：10月26日）

- ・授業改善マネジメントについての教育委員会からの提案
- ・「組織的な授業力・指導力向上を目指すマネジメント」についてのグループ協議
- ・講演「学力向上に組織的に取り組むための学校マネジメント」

国立教育政策研究所 総括研究官 白水 始 様

東京学芸大学 講師 末松 裕基 様

② 授業改善マネジメント教頭研修（小学校：11月25日 中学校：11月30日）

- ・授業改善マネジメントについての教育委員会からの提案
- ・「組織的な授業力・指導力向上を目指すマネジメント」についてのグループ協議
- ・グループ協議の成果発表

(4) 研究主任を対象とした授業改革戦略フォーラムの実施

① 授業改革戦略フォーラムⅠ（小学校：4月23日 中学校：4月24日）

- ・「新潟市学校教育の重点」「学校訪問」についての教育委員会からの説明
- ・「各学校の授業改善の取組」についてのグループ協議

② 授業改革戦略フォーラムⅡ（小学校：1月26日 中学校：2月3日）

- ・「次年度の全校体制で取り組む授業改善」についての教育委員会からの説明
- ・実践研究協力校の実践事例発表（東山の下小学校，小須戸中学校）
- ・「次年度に向けた自校の授業改善の方策」についてグループ協議
- ・講演「新潟市の授業づくりを具現するための研究主任のマネジメント」

高崎経済大学 講師 橋本 定男 様

- ・講演「子どもの成長と教師の関わり「話し合う」から「語り合う」関係の構築に向けて」

立命館大学 准教授 荒木 寿友 様

3. 協力校における取組

(1) 東山の下小学校の主な取組

① 「振り返り」の価値と型の明確化

なぜ「振り返り」が必要なのかについて、その価値を五つの面から明確にするとともに、「振り返り」の四つの型を具体化した。

② 「振り返りのある授業」の提案

校長による道徳の提案授業を通して、「振り返りのある授業」の具体的な姿を共有した。

③ 「振り返りのある授業」の日常化

一日1時間以上は「振り返りのある授業」を行うよう働きかけ、日常化を図った。

④ 学力向上推進会議での授業公開と指導

指導主事及び外部指導者の大学教授からすべての学級の授業を参観してもらい、アクティブ・ラーニングの実現に向けた「学習課題・まとめ・振り返り」のある授業について具体的な指導を受けた。

⑤ 研究主任による協議会資料の提供と授業評価

全校33の全ての授業について、研究主任が協議会資料と研究主任だよりを提供し、「振り返りのある授業づくり」に対し肯定的に評価を行った。

(2) 小須戸中学校の取組

① 「学習課題とまとめ」のプレート使用の日常化

全教室に「学習課題」「まとめ」のプレートを用意し、プレートを日常的に活用することを通して、「何を追究するのか」を生徒が意識できるとともに、授業の終末で「何を学んだのか」を自覚できるようにした。

② 「授業構想カードと展開」をフォーマットとした指導案の継続活用

A3版の左ページに構想カード、右ページに展開という統一フォーマットを継続的に使用することにより、新潟市の授業づくりのフレームワークが反映されるようにした。

③ 教科の枠を超えた授業検討チームの編成

複数教科の担当教師で授業検討チームを編成することにより、教科の枠を超え、「学習課題とまとめ」という観点からの授業検討を促した。

④ ホワイトボードや円卓ボードを活用したファシリテーションの推進

生徒の学習課題解決のためのかかわり合いの質的向上を図るため、ツールを活用したファシリテーションを推進した。

○ 実践研究の成果

1. 協力校における取組の成果

(1) 東山の下小学校の取組の成果

① 昨年度は、63%の教員が「振り返りのある授業」に取り組めていなかったが、今年度は、13%に減少し、毎日半数以上の授業で取り組んだ教員が30%になった。また、「振り返り」の効果についても94%の教員が実感している。

② 「しっかり振り返りを書いていますか」との児童アンケートに対し、91%の児童が肯定的な回答をしている。喜んで「振り返り」を書き進める児童の姿が多く見られるようになった。

③ 「お子さんに授業の話を知ったり、お子さんのノートを見たりしていますか」との保護者アンケートに74%の保護者が「はい」と回答している。また、「学校は分かり易い授業や個別指導など、学力が高まるように工夫していると思いますか」との設問に対し、96%の保護者が「はい」と回答している。

(2) 小須戸中学校の取組の成果

① 職員アンケートの結果、「授業改革の視点が明確になった」「課題解決のための関わり合いの手法が分類された」「3人チームによるOJTが機能した」等、職員の意識に肯定的な変化が見られた。

② 「毎時間の授業で何が分かり、何ができるようになったか言えますか」との生徒アンケートに対し、68%の生徒が肯定的な回答をしている。「学習課題とまとめ」をフレームワークとした授業改革が進んだ成果である。

③ 「ミニホワイトボードは、気軽に発言したり、話し合っている内容を理解したりすることに役立っていますか」との生徒アンケートに対し、92%の生徒が肯定的な回答をし

た。ツールの活用は生徒のファシリテーションを促進していた。

2. 実践研究全体の成果

(1) 「新潟市の授業づくり」の具現のための計画訪問の成果等

今年度、計画訪問を行った87校の校長を対象に行ったアンケートにおいて、100%の校長が「教育委員会の計画訪問は授業改善の役に立つ」と回答した。また、代表者による授業ではなく、全学級が指導案を作成して授業を公開したことについても、100%の校長が肯定的な回答をした。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・学校全体として取り組んでいる授業改善の方向がより明確になり、職員が同じ方向を目指して気持ちを一つにして進むことがより強化された。
- ・全学級の授業を公開することによって、一人一人の職員の確実な授業改善につながった。
- ・小グループでの協議会という形態によって、職員が日常抱えている自分の悩み等を気兼ねなく話すことができ、有意義な時間となった。
- ・一人一人の授業や学級経営の様子を見ていただき、良い点と課題を具体的に伝えていただいたので、担任の意欲が向上した。また、授業の改善にもつながった。

(2) 授業マネジメント研修の成果等

授業マネジメント研修後のアンケートにおいて、参加した校長の100%が、授業改善に向けた教育委員会の取組について肯定的な回答をしており、自校の取組の参考になったとしていた。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・アクティブ・ラーニングの意義とその導入方法についてよく理解できた。見方が変わった。
- ・学習課題の質や家庭学習の実態に照らしての説明があり、参考になった。
- ・学校の取組、職員の意識の変容等、具体的な事実を伴った指導に確かな手応えを感じている。
- ・取組を焦点化し、やりきることによって成果が上がることを実感している。

(3) 授業改善戦略フォーラムの成果等

授業改善戦略フォーラム後のアンケートにおいて、参加した研究主任の99%が、授業改善に向けた教育委員会の取組について肯定的な回答をしており、自校の授業改善の方策を考える上で参考になったとしていた。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・次年度に向けて何に取り組めばよいか整理できた。
- ・実践協力校である東山の下小学校の取組が参考になった。
- ・実践協力校である小須戸中学校の取組が参考になった。
- ・「振り返り」の意義や要件を明示していただいて参考になった。
- ・質の高いアクティブ・ラーニングのためには質の高い学習課題が不可欠であると認識できた。

(4) 全国学力・学習状況調査の結果

新潟市全体の結果は、小学校、中学校とも、ほとんどの教科で全国の平均正答率（以下、全国平均）及び新潟県全体の平均正答率（以下、県平均）を上回ったか同じであった。中学校理科については、全国平均を0.3ポイント下回った。

小学校は、全ての教科で全国平均を上回り、特に理科では5ポイントと全国平均を大きく

上回った。また、設問別に見ると、全国平均を上回った問題は、算数Bで約6割にとどまったが、それ以外の教科では8割～10割であった。

中学校は、理科以外の教科で全国平均及び県平均を上回った。設問別に見ると、全国平均を上回った問題は、国語と理科で4割～5割、数学Aで7割であったが、数学Bについては10割であった。

学年	教科	新潟市	全国	県	全国との差
小学校 6年	国語A	73.5%	70.0%	73.2%	+3.5 p
	国語B	69.3%	65.4%	67.2%	+3.9 p
	算数A	77.6%	75.2%	77.4%	+2.4 p
	算数B	45.9%	45.0%	44.9%	+0.9 p
	理科	65.8%	60.8%	63.1%	+5.0 p
中学校 3年	国語A	76.0%	75.8%	76.0%	+0.2 p
	国語B	66.1%	65.8%	66.0%	+0.3 p
	数学A	65.7%	64.4%	64.4%	+1.3 p
	数学B	43.7%	41.6%	42.2%	+2.1 p
	理科	52.7%	53.0%	52.1%	-0.3 p

3. 取組の成果の普及

- ・授業改革戦略フォーラムにおいて、協力校から取組発表をしてもらい、取組方法や成果について普及を図った。
- ・取組の成果を「授業づくりガイドブック」「授業づくりリーフレット」の改訂に反映させた。

○ 今後の課題

- ・学習課題の質は高まってはきているが、まだ十分ではない。「内容性」「情意性」「集団性」という視点から学習課題の質をさらに高め、質の高いアクティブ・ラーニングの促進を図る。
- ・「問題解決型」「技能習得型」「単元型」の三つのフレームワークに対する理解が進むよう各学校に働きかけ、ねらいに合った柔軟な授業づくりを推進する。
- ・「学習課題とまとめ」だけでなく、「振り返り」にも目を向け、「獲得した知識や技能」「解決の過程・学び方」「情意」の三つの要素が含まれた「振り返り」が具現されるようにするとともに、授業と家庭学習が連携されるようにする。

(様式2)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【推進地区】

都道府県名 (推進地域)	新潟市	番号	55
-----------------	-----	----	----

市町村名 (推進地区名)	新潟市
-----------------	-----

○ 推進地区として実施した取組内容

1. 研究課題

日々の授業で児童生徒が「何を学んでいるのか」「どのように学んでいるのか」「何が分かり、できるようになったのか」を自覚できることが確かな学力の向上につながる。そのために、「学習課題」と「まとめ」のある、児童生徒が主体的・協働的に学ぶ授業(アクティブ・ラーニング)の具現に向けた全市的な授業改善の取組を組織的、計画的に行う。また、協力校の具体的な取組と成果を市全体で共有する。そのことにより、全国学力・学習状況調査の学校間差を昨年度より少なくするとともに、全国平均を下回る学校数を減らす。

2. 研究課題への取組状況

(1) 実践協力校への指導・支援

① 第1回学力向上推進会議(平成27年11月6日 小須戸中学校)

■推進会議①

小須戸中学校の取組説明

■授業公開(9学級)

指導案はA3見開き(左ページに構想カード, 右ページに展開)

■推進会議②

- ・グループ協議(「学習課題とまとめ」をフレームワークとした授業改革についての成果と課題を話し合う。
- ・協議内容の発表(グループ代表から協議内容を発表)
- ・学校支援課の総括(保科総括指導主事)

■指導

- ・岩崎 保之 教授
- ・田中 博之 教授

② 第2回学力向上推進会議(平成27年12月16日 東山の下小学校)

■推進会議①

- ・東山の下小学校の取組説明

■授業公開① 4校時

■授業公開② 5校時

※ 授業公開①②とも，1時間の板書計画型略案による授業

※ 授業公開①②とも，A B二つのグループに分け，田中教授と岩崎教授はそれぞれのグループを参観。

■分科会

- ・5分科会を設定し，それぞれの分科会にコーディネーターとして指導主事が入り，一つ一つの授業について具体的に指導を行った。

■推進会議②

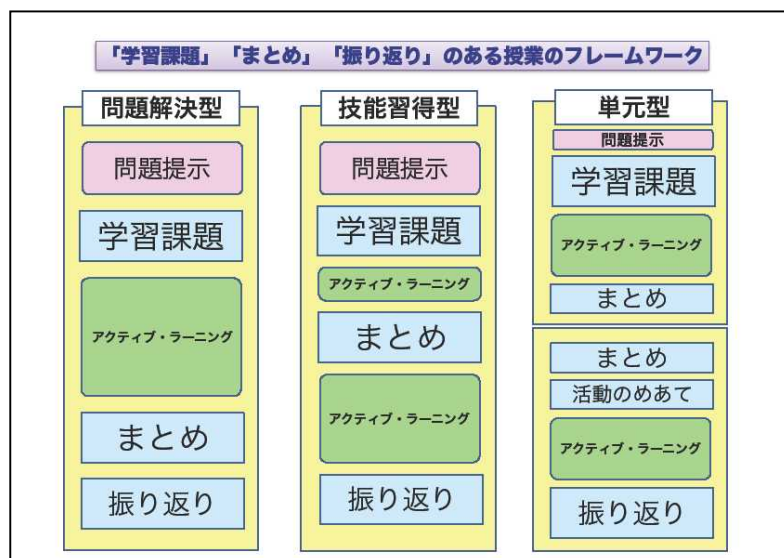
岩崎 保之 先生

田中 博之 先生

(2) 教育委員会主催の研修会開催等の取組

- ① 授業改善のための「授業づくりリーフレット」，「授業づくりガイドブック」等を活用した授業改善の取組

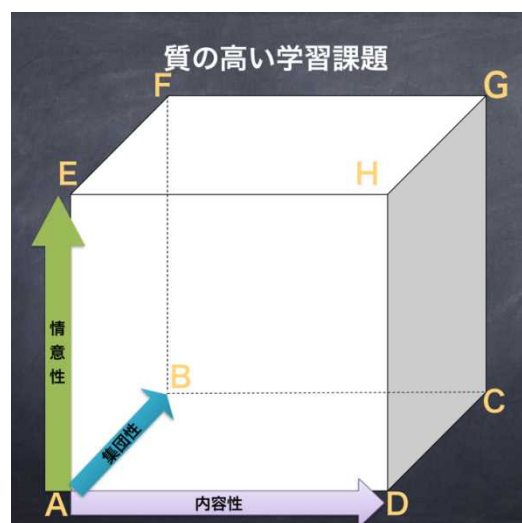
右図は「ねらいと評価の明確化」を目指した新潟市の授業づくりのフレームワークである。今年度は，右のフレームワークを活用した授業改善の中で，学習課題の質を向上させること，アクティブ・ラーニングを充実させることに焦点を当てて授業改善を推進してきた。



質の高い学習課題には，「内容性」「情意性」「集団性」の三つの要素があり，これらを高めていくことによって，質の高い学習課題の具現化と明確な目的をもったアクティブ・ラーニングの充実が図られるよう働きかけた。

② 市内各学校への計画訪問

市内168校(小111校，中57校)のうち，今年度は87校について指導主事が計画的に訪問した。学校訪問時は，全学級に指導案作成及び授業公開を依頼し，複数の指導主事が分科会を分担しながら全ての授業について具体的な指導を行った。



また，全体指導の場を設定し，「質の高い学習課題」について，具体例を基にしながら話

をしたり、アクティブ・ラーニングが具現されている授業映像等を提示したりしながら全体指導を行った。

(3) 管理職を対象とした授業マネジメント研修会の実施

① 授業改善マネジメント校長研修（小学校：10月19日 中学校：10月26日）

- ・授業改善マネジメントについての教育委員会からの提案
- ・「組織的な授業力・指導力向上を目指すマネジメント」についてのグループ協議
- ・講演「学力向上に組織的に取り組むための学校マネジメント」

国立教育政策研究所 総括研究官 白水 始 様

東京学芸大学 講師 末松 裕基 様

② 授業改善マネジメント教頭研修（小学校：11月25日 中学校：11月30日）

- ・授業改善マネジメントについての教育委員会からの提案
- ・「組織的な授業力・指導力向上を目指すマネジメント」についてのグループ協議
- ・グループ協議の成果発表

(4) 研究主任を対象とした授業改革戦略フォーラムの実施

① 授業改革戦略フォーラムⅠ（小学校：4月23日 中学校：4月24日）

- ・「新潟市学校教育の重点」「学校訪問」についての教育委員会からの説明
- ・「各学校の授業改善の取組」についてのグループ協議

② 授業改革戦略フォーラムⅡ（小学校：1月26日 中学校：2月3日）

- ・「次年度の全校体制で取り組む授業改善」についての教育委員会からの説明
- ・実践研究協力校の実践事例発表（東山の下小学校、小須戸中学校）
- ・「次年度に向けた自校の授業改善の方策」についてグループ協議
- ・講演「新潟市の授業づくりを具現するための研究主任のマネジメント」

高崎経済大学 講師 橋本 定男 様

- ・講演「子どもの成長と教師の関わり「話し合う」から「語り合う」関係の構築に向けて」

立命館大学 准教授 荒木 寿友 様

3. 実践研究の成果の把握・検証

(1) 「新潟市の授業づくり」の具現のための計画訪問の成果等

今年度、計画訪問を行った87校の校長を対象に行ったアンケートにおいて、100%の校長が「教育委員会の計画訪問は授業改善の役に立つ」と回答した。また、代表者による授業ではなく、全学級が指導案を作成して授業を公開したことについても、100%の校長が肯定的な回答をした。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・学校全体として取り組んでいる授業改善の方向がより明確になり、職員が同じ方向を目指して気持ちを一つにして進むことがより強化された。
- ・全学級の授業を公開することによって、一人一人の職員の確実な授業改善につながった。
- ・小グループでの協議会という形態によって、職員が日常抱えている自分の悩み等を気兼ねなく話すことができ、有意義な時間となった。
- ・一人一人の授業や学級経営の様子を見ていただき、良い点と課題を具体的に伝えていただいたので、担任の意欲が向上した。また、授業の改善にもつながった。

(2) 授業マネジメント研修の成果等

授業マネジメント研修後のアンケートにおいて、参加した校長の100%が、授業改善に向けた教育委員会の取組について肯定的な回答をしており、自校の取組の参考になったとしていた。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・アクティブ・ラーニングの意義とその導入方法についてよく理解できた。見方が変わった。
- ・学習課題の質や家庭学習の実態に照らしての説明があり、参考になった。
- ・学校の取組、職員の意識の変容等、具体的な事実を伴った指導に確かな手応えを感じている。
- ・取組を焦点化し、やりきることによって成果が上がることを実感している。

(3) 授業改善戦略フォーラムの成果等

授業改善戦略フォーラム後のアンケートにおいて、参加した研究主任の99%が、授業改善に向けた教育委員会の取組について肯定的な回答をしており、自校の授業改善の方策を考える上で参考になったとしていた。具体的には、次のような成果を挙げている。

- ・次年度に向けて何に取り組めばよいか整理できた。
- ・実践協力校である東山の下小学校の取組が参考になった。
- ・実践協力校である小須戸中学校の取組が参考になった。
- ・「振り返り」の意義や要件を明示していただいて参考になった。
- ・質の高いアクティブ・ラーニングのためには質の高い学習課題が不可欠であると認識できた。

(4) 協力校の成果等

① 東山の下小学校の取組の成果

ア 昨年度は、63%の教員が「振り返りのある授業」に取り組めていなかったが、今年度は、13%に減少し、毎日半数以上の授業で取り組んだ教員が30%になった。また、「振り返り」の効果についても94%の教員が実感している。

イ 「しっかり振り返りを書いていますか」との児童アンケートに対し、91%の児童が肯定的な回答をしている。喜んで「振り返り」を書き進める児童の姿が多く見られるようになった。

ウ 「お子さんに授業の話の話を聞いたり、お子さんのノートを見たりしていますか」との保護者アンケートに74%の保護者が「はい」と回答している。また、「学校は分かり易い授業や個別指導など、学力が高まるように工夫していると思いますか」との設問に対し、96%の保護者が「はい」と回答している。

② 小須戸中学校の取組の成果

ア 職員アンケートの結果、「授業改革の視点が明確になった」「課題解決のための関わり合いの手法が分類された」「3人チームによるOJTが機能した」等、職員の意識に肯定的な変化が見られた。

イ 「毎時間の授業で何が分かり、何ができるようになったか言えますか」との生徒アンケートに対し、68%の生徒が肯定的な回答をしている。「学習課題とまとめ」をフレームワークとした授業改革が進んだ成果である。

ウ 「ミニホワイトボードは、気軽に発言したり、話し合っている内容を理解したりす

ることに役立っていますか」との生徒アンケートに対し、92%の生徒が肯定的な回答をした。ツールの活用は生徒のファシリテーションを促進していた。

(5) 全国学力・学習状況調査の結果

学年	教科	新潟市	全国	県	全国との差
小学校 6年	国語A	73.5%	70.0%	73.2%	+3.5 p
	国語B	69.3%	65.4%	67.2%	+3.9 p
	算数A	77.6%	75.2%	77.4%	+2.4 p
	算数B	45.9%	45.0%	44.9%	+0.9 p
	理科	65.8%	60.8%	63.1%	+5.0 p
中学校 3年	国語A	76.0%	75.8%	76.0%	+0.2 p
	国語B	66.1%	65.8%	66.0%	+0.3 p
	数学A	65.7%	64.4%	64.4%	+1.3 p
	数学B	43.7%	41.6%	42.2%	+2.1 p
	理科	52.7%	53.0%	52.1%	-0.3 p

新潟市全体の結果は、小学校、中学校とも、ほとんどの教科で全国の平均正答率（以下、全国平均）及び新潟県全体の平均正答率（以下、県平均）を上回ったか同じであった。中学校理科については、全国平均を0.3ポイント下回った。

小学校は、全ての教科で全国平均を上回り、特に理科では5ポイントと全国平均を大きく上回った。また、設問別に見ると、全国平均を上回った問題は、算数Bで約6割にとどまったが、それ以外の教科では8割～10割であった。

中学校は、理科以外の教科で全国平均及び県平均を上回った。設問別に見ると、全国平均を上回った問題は、国語と理科で4割～5割、数学Aで7割であったが、数学Bについては10割であった。

4. 今後の課題

- ・学習課題の質は高まってはきているが、まだ十分ではない。「内容性」「情意性」「集団性」という視点から学習課題の質をさらに高め、質の高いアクティブ・ラーニングの促進を図る。
- ・「問題解決型」「技能習得型」「単元型」の三つのフレームワークに対する理解が進むよう各学校に働きかけ、ねらいに合った柔軟な授業づくりを推進する。
- ・「学習課題とまとめ」だけでなく、「振り返り」にも目を向け、「獲得した知識や技能」「解決の過程・学び方」「情意」の三つの要素が含まれた「振り返り」が具現されるようにするとともに、授業と家庭学習が連携されるようにする。

**「学力に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【協力校】**

都道府県名 (推進地域)	新潟市	番号	55
-----------------	-----	----	----

協力校名	新潟県新潟市立東山の下小学校
------	-----------------------

1 協力校における学力に関する課題

(1) 学力に関する現状

	国語 A		国語 B		算数 A		算数 B	
	H25	H26	H25	H26	H25	H26	H25	H26
東山の下小	63.1	75.4	44.5	58.6	79.8	79.2	57.3	58.5
全国平均比	+0.4	+2.5	-4.9	+3.1	+2.6	+1.1	-1.1	+0.3

25年度は、国語、算数共にB問題で全国平均を下回っていたが、26年度の結果では、2教科4領域すべてで全国平均を上回ることができた。また、当校でよく見られていた正規分布的ではなく低位に山ができる傾向は、それほど顕著ではなかった。しかしながら、NRTの結果等をみると、26年度の全国学力調査の結果は、全校的な傾向とは言えない。学年によって学力検査の結果に大きな差が見られる。

これまでの全国学力・学習状況調査における学力の結果と児童質問紙の結果との関係を見ると、自己肯定感や学ぶことの有用感の状況が学力の結果に大きく影響していることが分かった。学習意欲が低下している学年で、学力の落ち込みが見られるのである。

(2) 学力に関する課題

全国学力調査、NRT、県や市で行っている学力調査の結果から、全体として言えることは、国語では、必要とされる情報を選択し、比較したり関係づけたりして文章をまとめる力、算数では、解き方を論理的に説明する力や既習事項を活用して新たな問題を解決していく力に弱さがある。また、学習意欲を高めるために、自己肯定感や学ぶことの有用感を高めていく必要がある。

2 協力校としての取組状況

(1) 昨年度の取組の成果と課題から

昨年度は、中央値よりも低次に位置する児童の学力を高めるために「学習課題とまとめ・振り返りある授業づくり」に取り組んだ。その結果、「学習課題とまとめ」については、授業を担当する教員のほぼ全員が目標とする1日に2時間以上の授業で実践することができ、ほぼ全員が児童の学習理解に効果があると実感することができた。また、児童の94%が「学習課題とまとめのある授業」の方が分かりやすいと答えた。

しかしながら、「振り返り」については、13%の教員しか取り組むことができなかった。「学習課題とまとめのある授業づくり」に取り組むことで精一杯であったからである。子どもの学習意欲の向上に向けて、子どもの自己肯定感や学ぶことの有用感を高めるために、27年度は、「振り返りのある授業づくり」に焦点付けて取り組むことにした。

(2) 「振り返りのある授業づくり」への取組 ～ 日々の実践を充実させるために ～

① 教員の意欲を促す取組1 ～ 「振り返り」の価値の明確化 ～

授業に「振り返り」を採り入れることについて、その価値もやり方も分かっていないし、時間の確保も難しいとして、年度当初は、その導入に消極的な教員が多かった。

そこで、「振り返り」の重要性を主張されていた国立教育政策研究所 総括研究官 白水 始様の研究室を校長と研究主任で訪問させていただき、「振り返り」を採り入れる価値や方法等についてご指導いただいた。また、当校の地域にある教育支援センター指導主事 田中 和昭様からも「振り返り」の価値について具体的にご指導いただいた。中央と地域で指導的な立場におられるお二人のご指導を当校教員に伝えるとともに、ご指導いただいたことを基に、「振り返り」を採り入れる価値を次のように明確にした。

- | | |
|---|-------------|
| ○ 学習内容の定着度をより高めることができる | 学ぶ価値
の認識 |
| ○ 学習内容の定着度を個別に把握することができる | |
| ○ 自己肯定感を高めることができる (できた!分かった!) | |
| ○ 自分の考えの変容を認識させることができる (メタ認知力の向上) | |
| ○ かかわり合う価値を認識させることができる (アクティブラーニングへのつながり) | |

② 教員の意欲を促す取組2 ～「振り返り」の型の明確化～

どのような振り返りのさせ方があるのだろうか、と「振り返り」の型や方法が分からずに、不安感を募らせている教員が多かった。そこで、4つの型とそれぞれの型の具体を示した。

- | | |
|---------------|---------------|
| A型：〇〇日記型振り返り | B型：キーワード型振り返り |
| C型：考えの変容型振り返り | D型：価値付け型振り返り |

③ 教員の意欲を促す取組3

～「振り返り」を採り入れた授業を見せる～

指導主事を招いて当校教員に「振り返りのある授業」を見せたいと考えたが、なかなか都合が合わなかったため、校長が道徳の授業で「振り返りのある授業」を提案した。



④ 教員の意欲を促す取組4 ～ 研究主任による授業づくりの資料提示と相談会～

教員が公開授業による実践研修を始める際に、研究主任が公開授業のための授業づくり資料を作成し、授業づくりの相談にのった。授業者が気楽に「振り返りのある授業づくり」に取り組めるよう配慮した。33学級の実践すべてで行った。

⑤ 教員の意欲を促す取組5 ～ 型は自由&目標は毎日1時間以上～

授業公開時だけではなく、取組の日常化が必要である。そこで、28年度の高学年の目標をC型の「振り返り」に設定したが、27年度は、どの型でも自由とした。また、時間も毎日1時間以上と目標値を設定した。教員の負担を軽減することで、「振り返りのある授業づくり」の日常化を図るためである。

⑥ 教員の意欲を促す取組6

～ 大学教授や指導主事からの肯定的なご指導～

26・27年度の2年間に3回の学力向上推進会議を行った。そこで、早稲田大学 教授 田中博之 様、新潟青陵大学 教授 岩崎 保之様から、すべての学級の授業を参観いただいた上で、アクティブラーニングの実現に向けた学習課題の設定からまとめに至る授業づくりや振り返りの実践に対して肯定的なご指導をいただいた。学校全体にとっても、教員一人一人にとっても、大きな自信となった。



⑦ 教員の意欲を促す取組7 ～ 協議会資料と研究主任だよりによる肯定的評価～

全校33実践のすべての授業に対して、協議会資料と研究主任だよりで、各教員が行った「振り返りのある授業づくり」に対して肯定的に評価した。その結果、実践を重ねるごとに「振り返り」の内容が充実していった。

(3) その他の取組

① 同じ指導場面の板書写真とノートを持ち寄っての

学年研修会の実施 ～考え方や技能差を埋めるために～
教科書の同じ場面について、板書写真とノートを持ち寄る研修会を、各学年で最低年2回実施した。同じ場面であるのに「学習課題やまとめ」や「振り返り」の内容が大きく異なっていることを話題にして、よりよい「学習課題とまとめ」のつくり方や「振り返り」への導き方について協議することで、教員間の考え方や技能の差を埋めていく。



② 学習ルール「東山の下小スタンダード5」と家庭学習「宿題+ ONE +開始時刻」の実施 学習規律の徹底と家庭学習をマネジメントする力の育成を児童の生活改善の柱とした。

学習規律については、これまで学級や学年に任せていたが、今年度より全学級で共通して取り組む内容を5つ決め、徹底を図った。家庭学習では、すべての児童に自主学習の内容(ONE)と家庭学習を始める時刻を自分で決めて実施させることを課した。

③ たよりを通しての保護者への周知 ～保護者と「振り返り」の成果を共有するために～

保護者と「振り返りのある授業づくり」の取組とその成果について共有するために、学校だより、学級だより「振り返り」の内容を掲載するように努めた。その結果、保護者が子どものノートに関心をもち、子どもへ声がけをするようになった。そのことが、子どもの「振り返り」の内容の充実につながった。

3 取組の成果の把握・検証

(1) 職員の取組の変容

「振り返りのある授業」を毎日どれだけ行っているかについて全教員に問い掛けた。今年度の目標は、毎日1時間以上の授業で「振り返り」を採り入れることに設定してある。

調査の結果、26年度10月にはほとんど取り組めなかった教員が63%で、2月が32%であったが、27年度は13%に減少し、毎日半数以上の授業で取り組んだ教員が30%になった。「振り返りのある授業」の日常化が進んでいる。

さらに、「振り返り」の教育的効果について、17%の教員が「かなり効果がある」、77%の教員が「ある程度の効果がある」と感じている。まだ、実践を始めて間もないが、多くの教員が効果を実感し始めていることに手応えを感じている。

(2) 児童の状況

「しっかりと振り返りを書いていますか。」との児童アンケートに対して、63%の子どもが「とてもそう思う。」と、28%の子どもが「そう思う。」と回答している。どの学級でも、「振り返り」の場面で、生き生きと書き進めている子どもの姿を見ることができる。年度当初、子どもが書くことに抵抗感を示すのではないかと懸念をもつ教員が多かったが、むしろ喜んで書き進める子どもの姿がたくさん見られた。

(3) 保護者の意識

「お子さんに授業の話を知りたい、お子さんのノートを見たいですか。(今年度新設)」の問い掛けに、74%の保護者が「はい」と回答している。3/4の保護者が日々の授業の様子に関心をもち、行動に移していることが分かる。また、「学校は分かりやすい授業や個別指導など、学力が高まるように工夫していると思いますか。」の問い掛けに、「はい」の回答が26年度は74%であったが、今年度は96%と大幅に評価が上がっている。

4 今後の課題

当校の児童の学力は、学年によって大きく異なるのが、特徴である。その要因の1つを学習意欲ととらえ、「振り返りのある授業づくり」に取り組んできた。27年度は、ほとんどの教員が日常的に取り組む、その教育的効果を実感し始めている。28年度は、学年(発達段階)に応じた「振り返り」の型を決め、取組時数の目標も増やすことで、教育的効果を一層高めていきたい。

この取組が学力向上に数値として反映されるには、今しばらくの時間がかかると思うが、必ずや当校児童の学力向上につながるものと確信している。

(様式3)

「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究(小・中学校)」
平成27年度委託事業完了報告書
【協力校】

都道府県名 (推進地域)	新潟市	番号	55
-----------------	-----	----	----

協力校名	新潟県新潟市立小須戸中学校
------	---------------

○ 協力校として実施した取組内容

1. 協力校における学力に関する課題

平成26年度全国学力・学習状況調査において、当校は国語、数学のA問題、B問題のすべてで全国平均を上回った(全国との比較:国語A+4.3ポイント,国語B+10.7ポイント,数学A+6.9ポイント,数学B+10.2ポイント)。

学力の向上に向けて、1年次研究で次のことに取り組んだ。

- | |
|--|
| <p>○ 授業で「何を追究するのか」を生徒が意識できるとともに、終末においては「何を、学んだのか」も自覚できるようにする。</p> <p>具体的には、「学習課題」と「まとめ」のマグネットプレートを全教室の黒板に常備し、それらを活用して、何をどう学んでいるのかが見える構造的な板書づくりに取り組む。</p> <p>○ 「生徒同士のかかわり合い」の場面を積極的に授業の中に位置付けていく。</p> <p>互いの気付きや考えを交流することで見方や考え方などに広がりができたり、課題解決に向けて互いの考えを検討することでよりよい解決を導き出したりできるようにする。</p> <p>これら交流や検討の活動が効果的に組織できるよう少人数で使用するホワイトボードを整備していく。</p> |
|--|

新潟市教育委員会が市内全小中学校・中等教育学校を対象に行っている「生活実態や学習に対する意識調査」によると、以下のような成果と課題が明らかになった。

- ・ 当校の生徒は「学習課題」と「まとめ」を提示する授業が行われるようになってきているとその変化に気付いている。
- ・ 話し合い活動については「普段の授業では、友達同士で話し合う活動を行っていることが多い」「話し合う活動が好き」「自分の考えを発表する機会も設定されている」は市の平均を上回っている。しかしながら、「自分の考えを進んで発表している」生徒について、「当てはまる」「やや当てはまる」を加えても4割程度に留まり、市の平均をわずかに上回ってはいるものの、半数以上の生徒が「自分の考えを進んで発表している」とは言えない。

これらのことから、授業が変わりつつあるものの、主体的に表現する生徒の育成に向けた取組には不十分さを残していることが明らかになった。

2. 協力校としての取組状況

(1) 今年度の授業改善の取組をはじめるとにあたって

昨年度の課題をもとに、今年度の取組内容を検討するにあたって、職員間で次のような考察がなされた。

- 発表する機会は設定されているが、「自分の考えを進んで発表している」と半数以上の生徒が肯定的な回答をしない理由は、自分の考えや意見に自信を持つことができていないためではないか。
- 考えや意見に自身を持たせる手段として、昨年度から取り組んでいる〈かかわり合い〉の場面にさらに工夫を加え、多くの生徒がより主体的に学習できるようにすることが、課題の解決につながるのではないか。

さらには、授業のねらいとそのため学習活動を精選することに加えて、〈かかわり合い〉の効果を高めるために、「学習課題」と「まとめ」をフレームとした授業づくりを引き続き推進していくことについて合意形成を得た。

そして、平成27年度は、「自ら考えをもち、自信をもって発言できる生徒」を目指す生徒像として設定し、職員同士も意見を交流しながら、ともに授業改善を進めていくことを確認した。

(2) 授業改善の取組の内容

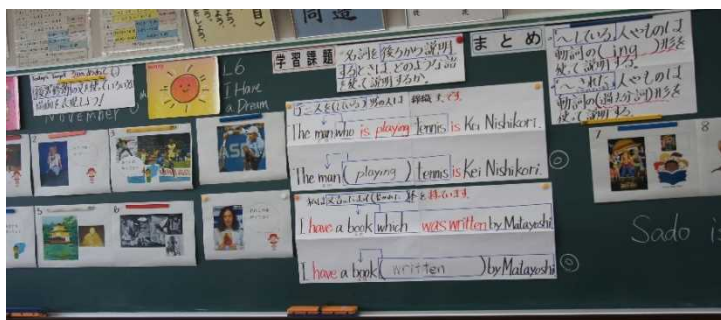
① 取組の重点

<重点ア>

「何を追究するのか」を生徒が意識できるとともに、授業の終末においては「何を学んだのか」も自覚できるようにする（学習課題とまとめのプレート使用の日常化）。

<重点イ>

「生徒同士のかかわり合い」を通して、主体的に自分の考えを表現できるようにする。



② 取組の具体

<重点ア>については、主に「学習課題」と「まとめ」をフレームとした授業づくりを全職員で検討していくために、以下のような具体的な取組を行った。

- 「授業構想カードと展開」という授業検討のための統一フォーマットの継続活用
- 教科の枠を越えた3名構成の授業検討チームの編成
- 生徒が追究したいと思う「学習課題」とその提示に焦点づけた検討会の実施

<p>第1学年 理科 顕微鏡の観察</p> <p>顕微鏡の構造と用途の理解（目鏡・物鏡・載物台・ステージ・粗動・微動）</p> <p>観察対象：植物細胞（マメ科植物の根の切片と動物細胞）</p> <p>観察の目的：細胞の構造と機能の理解</p> <p>観察の方法：顕微鏡の正しい使い方を理解し、観察を行う。</p> <p>観察の結果：植物細胞と動物細胞の構造の違いを比較し、その機能の違いを推察する。</p> <p>観察のまとめ：観察の結果をまとめ、レポートを作成する。</p>	<p>27年度追加 UDLチェック項目</p> <p>1. 観察の目的を明確にする。</p> <p>2. 観察の方法を事前に説明する。</p> <p>3. 観察の結果をまとめ、レポートを作成する。</p>
---	--



略案の形式を【授業構想カード+展開】に

<重点イ>については、課題解決のためのかかわり合いの質的向上を図るために、以下のような具体的な手立てを講じた。

- ファシリテーションの考え方や手法を取り入れた活動を推進する。
- ツール（ミニホワイトボード、円卓ボード、個人用ホワイトボード）を活用する。
- 意見を出しやすくするために、ペアやグループ活動を段階的に用いる。
- 課題解決のためのかかわり合いになっているのかをチームで検討する。



③ 取組の実施計画

5/28	提案授業及び、学習課題の提示とかかわり合いに焦点付けた3人チームでのファシリテーションによる検討
6/18	「かかわり合い」に焦点付けた活動の組織についての演習
6~7月	授業公開① 3人チームで授業後に20分間のファシリテーション（FT20）で授業評価
7/30	授業構想検討会①
9/14	授業構想検討会②
11/6	公開授業 9学級
11/9	公開授業 11学級
12月~	研究のまとめ（学校評価とリンクして全職員で行う）

(3) 公開授業後の20分ファシリテーション（FT20）における意見の例

【学習課題とまとめ】

- ・ 生徒から引き出す学習課題にすることで、生徒の学習意欲を喚起できる。
- ・ 生徒の課題になっても、課題追究に十分な時間がとれないと学習が深まらない。

- ・ 生活経験に基づいた認識からのズレを生む学習課題が、生徒の学習意欲を喚起する。
- ・ 課題解決のための材料を絞ることで、生徒の追究活動がスムーズに流れる。
- ・ まとめについて、教師の言葉だけで提示すると学びの自覚が浅い。
- ・ 生徒の反応を引き出して、まとめたほうが学んだことの自覚をうながす。
- ・ 生徒の意見をうまく価値付けて、授業をつないでいくことで、生徒主体の授業づくりができる。

【かかわり合い】

- ・ ねらいに即した内容と適切な時間配分で、かかわり合いの場面を設定することで学習効果が向上する。
- ・ 生徒が事前に観点を絞り動画を見ることで、生徒同士のアドバイスが具体化し、考えを深める活動を活性化することにつながる。
- ・ 生徒の演奏のよさを、教師の言葉によって具体的に価値付けることで、よりよい演奏のための意見交流が活発になる。
- ・ まとめ後に、定着のための活動として、かかわり合いの場面を設定したことによって学習内容の定着を図ることができた。

(4) 公開授業を参観した指導者の意見

- ・ ホワイトボードなどを使って、生徒が楽しそう<かかわりながら>学んでいる姿が素晴らしい。
- ・ 情意性に留意して学習課題を生み出す活動が見える。
- ・ アクティブな活動を積極的に取り入れているが、活動ばかりに意識がいき、教科の専門性が薄まってはいないか。

3. 取組の成果の把握・検証

(1) 取組の成果の把握

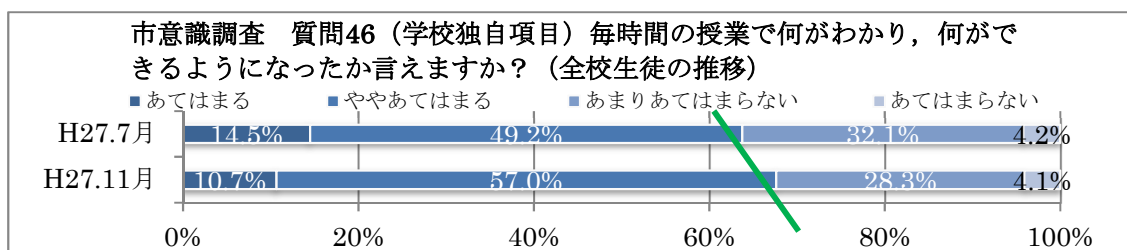
① 平成27年度全国学力・学習状況調査 (平均正答率 %)

教科		小須戸中	新潟市	新潟県	全国
国語	A	77.5	76.0	76.0	75.8
	B	66.8	66.1	66.0	65.8
数学	A	67.9	65.7	64.4	64.4
	B	46.6	43.7	42.2	41.6
理科		57.8	52.7	52.1	53.0

平成27年度全国学力・学習状況調査において、当校は国語、数学のA問題、B問題、理科のすべてで全国平均を上回った(全国との比較:国語A+1.7ポイント、国語B+1.0ポイント、数学A+3.5ポイント、数学B+5.0ポイント、理科+4.8ポイント)。また、県・市平均をも上回っている。これにより、学力の定着について、目標とした成果が達成できたと考える。

② 生徒の意識調査

全国学力・学習状況調査の生徒質問紙の回答の経年変化、新潟市生活・学習意識調査の回答の経年変化及び、年度内変化から、取組の成果を把握していくこととする。



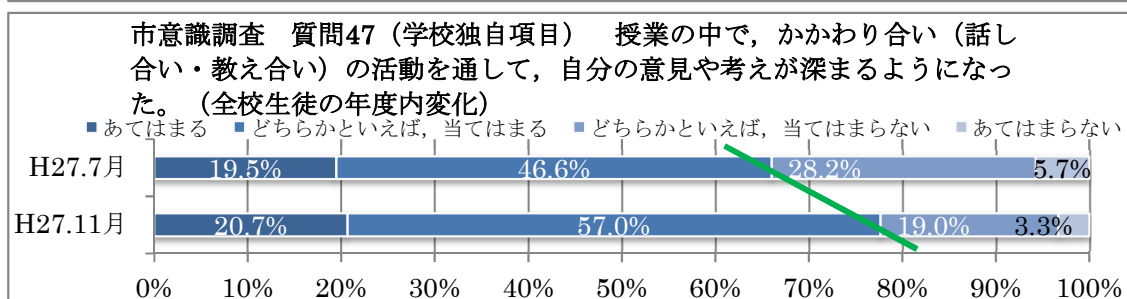
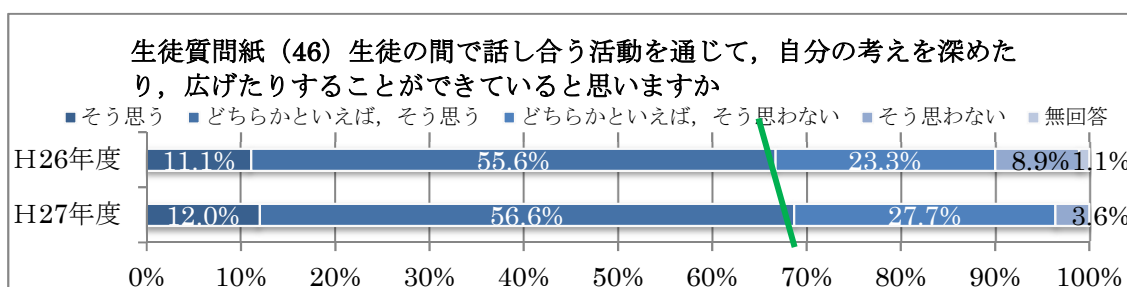
上のグラフは、取組の<重点ア>についての意識を直接質問した内容である。

年度内において、授業で学習内容を確実にとらえている生徒(全校生徒)が増加してきているという実態を見ることができる。「学習課題」と「まとめ」をフレームとした授業改革が進み、成果が表れてきたものととらえている。

続いて、<重点イ>についての質問である。

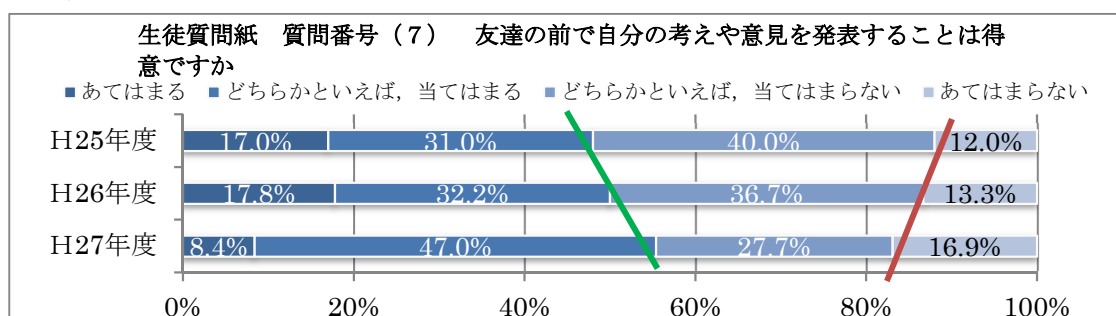
生徒質問紙(46)のグラフからは、昨年度との比較において、生徒同士のかかわり合いが学習効果を高めていると感じている生徒(3年生)が緩やかに増加しているという結果を見ることができる。

また、市意識調査質問 47 のグラフからは、全校生徒についても、生徒同士のかかわり合いによって学習効果が上がったと感じている生徒が増加している(年度内変化)。



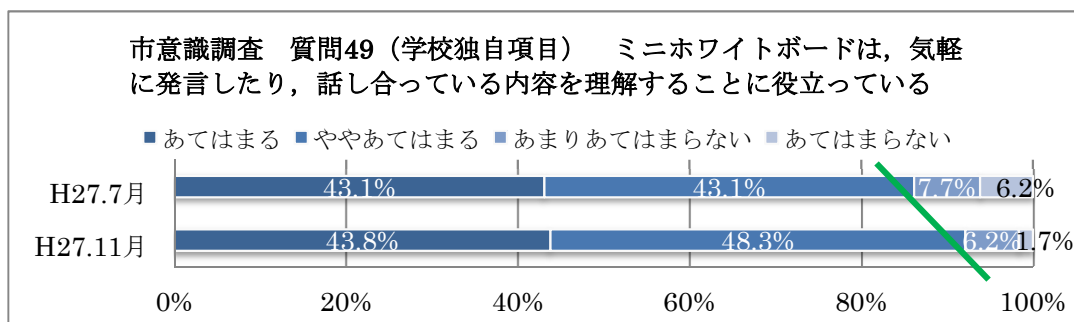
以上のように、目指す生徒像「自ら考えをもち、自信をもって発言できる生徒」の実現にむけて、「自ら考えをもち」という点は、かかわり合いの組織が有効であったことがわかる。

では、「自信をもって発言できる」については、どうであっただろうか。この点について、次の調査結果を考察する。



生徒質問紙（7）のグラフからは、意見を発表することが得意と感じている生徒（3年生）が、研究を始めた昨年度から毎年増加している。このことから、「自信をもって発言できる」という、生徒の姿が増えてきていると結論づける。

このときに、有効であった手立てについて以下の調査結果をもとに述べる。



<重点イ>にかかわる具体的な手立てのうち、「ツールの活用」がとても有効に働いたことがわかる。これらのツールは、ファシリテーションの手法やペア・グループ活動を取り入れることの大きな助けともなっていた。

③ 職員のアンケート調査（意見の抜粋）

- ・ 授業改革の必要感が増し、授業をつくる視点が明確になった。
- ・ 生徒の情意性を高める学習課題と提示までの時間配分が、職員共通の課題となり、その後の研修が深まった。
- ・ かかわり合いの手法が分類され、課題解決のためのかかわり合いが職員共通の課題となり、その後の研修が深まった。
- ・ 3人チームによる OJT が機能し、教科の枠を越えた授業づくりが推進されるとともに、普段から教務室での授業の話題が多くなった。

これらの意見にもみられるように、職員にも肯定的な変化がみられた。

4. 今後の課題

- ・ 生徒質問紙（7）に見られるように、意見を発表するのが得意と回答する生徒が増えている一方で、不得意と答える生徒も増えている。これは、かかわり合いなどで発言を求められる場面が増えたことによって、自己の不十分さが顕在化したためととらえられる。それが考えをもったりまとめたりする思考力や判断力にかかわるものなのか、あるいは、表現力にかかわるものなのか、さらには生徒の情意面によるものなのか、個々の生徒の実態を今後精査する必要がある。
- ・ アクティブな活動ばかりにとらわれることなく、その教科だから学べる価値や方法などを生かして学ぶ姿がみられるよう、教科の専門性に基づいた授業づくりをすすめることが必要である。そのための1つの視点として、学んだことのよさや価値に気づくための、まとめや振り返りの充実・工夫を図っていく必要がある。